

古典エチオピア語文法形態論覚え書き

—— 代名詞・動詞 ——

秋 山 学

〈目 次〉

1. 序論
2. 字母と表記
3. 発音に関する注意事項
4. 代名詞活用
5. 動詞活用
 - I 単純語幹活用
 - II 使役語幹活用
 - III 再帰受動語幹活用
 - IV 使役再帰語幹活用

1. 序論

先に筆者はシリア語初等文法・形態論に関する論考を公にした（「シリア語との対照によるアラム語動詞活用体系化の試み」『文藝言語研究』言語篇41, 1-41）。これを承けて本論考では、同じくセム語族に属するエチオピア語（古典エチオピア語＝ゲエズ語；本稿で以下「エチオピア語」と呼ぶ場合はこのゲエズ語を指す）に関して、やはり基本的文法の骨格となる代名詞・動詞の基礎形態を提示し、セム語の比較のため、また比較言語学に立脚して行われるべき比較典礼学等の研究のために役立てたいと考える。

エチオピア語も、基本的に動詞を構成する三つの「根字」が基礎となって諸概念の展開が見られるという、セム系諸言語の典型的な特徴を示している。以下序論的に、エチオピア語学をめぐる研究史の事項を記すことにしたい。

セム系比較言語学にエチオピア語が加わったのは、17世紀のことだと言われる。それまでにヘブル語、アラム語、アラブ語の間に緊密な相応関係が見出さ

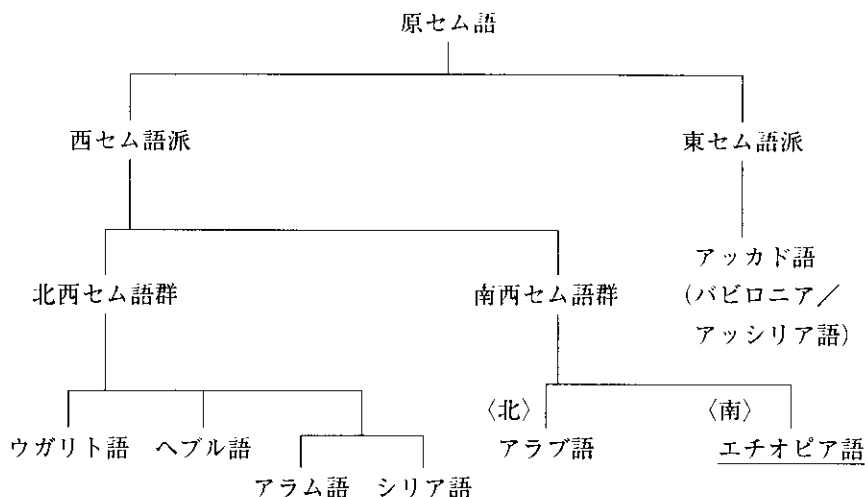
れることが既に知られていたが、古典エチオピア語すなわちゲエズ語は、セム系言語のなかで第四番目にこれらのうちに加わったことになる。さらに19世紀になって楔形文字が解読されるに及び、アッカド語（バビロニア／アッシリア語）が第五番目の対象として加わることになる。

紀元前数世紀の頃、原セム系の言語を話すセム系の一民族が、アラビア半島のイエメンから対岸アフリカのアビシニアに渡ったと考えられている。アクスムを中心都市として、彼らは王国を建設し、紀元後3世紀にキリスト教に改宗した。彼らの言語すなわち古代エチオピア語は、17世紀の初頭、現在のエチオピア口語であるティグレ語、ティグリーニャ語、アムハラ語に替わられるまで話されていた。古典エチオピア語としてのゲエズ語は、それ以降教会の典礼言語ないし文語として存続する。

現存するエチオピア文学の大半は、いくつかの碑文資料を除いて手写本の形で伝えられ、教会文献の色彩が濃く、その主たるものは旧約および新約聖書の翻訳である。神学的、宗教詩的、および典礼的な性格のかなりの量の文学が残っているほか、史的・年代記的・教会法的・数学的そして医学的な文献も残存している。ヨーロッパ人がエチオピアの言語と文学に初めて関心を抱いたのは16世紀のことであった。H. ルードルフ（1624-1704）が1661年に *Grammatica Aethiopica* を、またその数年後に *Lexicon Aethiopico-Latinum* を出版し、近代的エチオピア学の基礎が築かれた。それ以降、H. フープフェルト（1796-1866）、H. G. A. エーヴァルト（1803-1875）、Ch. F. A. デイルマン（1823-1894）、F. プレトリウス（1847-1927）、C. ベーツォルト（1859-1922）、I. グイディ（1844-1935）、E. リットマン（1875-1958）らによる優れたエチオピア研究が続くことになる。

以下に図示するように、ヘブル語、シリア／アラム語、アラブ語そしてエチオピア語を相互に比較することは、西セム語派の重要な言語、すなわちアッカド語（アッシリア語とバビロニア語より成る）を除いたセム語族の全貌を把握することを意味する。これは言語学のみに留まらず、それらセム語に関係するすべての学問——聖書学、教父学、典礼学、歴史学等々——に益する作業となろう。

〈セム語系統図（概略）〉



〈本稿で使用する主な参考文献〉

D.L.O'Leary, *Comparative Grammar of the Semitic Languages*, London 1923

（以下「オレアリ」）。

S.A.B.Mercer, *Ethiopic Grammar with Chrestomathy and Glossary*, Oxford 1920

（以下「メルサ」）。

Th.O.Lambdin, *Introduction to Classical Ethiopic (Ge'ez)*, Missoula 1978

（以下「ラムダン」）。

M.Chaine, *Grammaire Ethiopienne*, Beyrouth 1938.

A.Dillmann / C.Bezold (tr.by J.A.Crichton), *Ethiopic Grammar*, London 1907.

W.Leslau, *Concise Dictionary of Ge'ez (Classical Ethiopic)*, Wiesbaden 1989.

本稿は、ラムダンによる新しい体系的文法を参照しつつ、メルサの§ 37～§ 57（動詞活用）を簡潔にまとめ直した形で提示することを目的とする。メルサはエチオピア文字を一貫して用い、意義深いのが、根本的な誤りはラムダンにより訂正する必要がある。セム語にあっては、動詞活用と不可分なのが代名詞活用であるため、動詞活用とあわせて代名詞活用の表記をまず付記しておかねばならない。さらに、セム語族に関して論ずる際には、各語に独特の発音表記を伴う文字が存在するため、これをパソコン等のキーボードにいかになじむものに改変するかが課題となる。それに伴って、本論における発音表記を確定する

ために、アルファベット表記から始める。これは言うまでもなく、言語学的正確さを期したものではない。

2. 字母と表記

エチオピア語のアルファベットは、まず次の26文字より成る。

〈名称〉	〈翻字〉	〈名称〉	〈翻字〉
1. ホーイ	h	14. カーフ	k
2. ラウエ	l	15. ウァーウィー	w
3. ハウト	H (h の下点)	16. アイン	‘
4. マーイ	m	17. ザイ	z
5. シャウト	sh	18. ヤマン	y
6. レエス	r	19. ダント	d
7. サート	S	20. ガムル	g
8. カフ	q	21. タイト	T (t の下点)
9. ベート	b	22. パイト	P (p の下点)
10. タウエ	t	23. サダーイ	ç (s の下点)
11. ハルム	ch (h の下波線)	24. ダツパ	D (d の下点)
12. ナハース	n	25. アフ	f
13. アルフ	’	26. パ	p

これらの各々に対して、以下に記す7種類の母音が伴う。そのそれぞれに関する文字は上に記した26文字〔下記1), a音を伴う場合に等しい〕を基礎とし、各母音に関して規則性を遵守しながら、少しずつ異なった字形を呈する。各母音を伴う場合の字形に関して、下表におおよその目安を記しておく。こうしてエチオピア語の文字体系は、基本的に $26 \times 7 = 182$ 個の文字形より成立していることになる。このほか、アムハラ語やティグレ語などからの借用語を表記するために別の字形が編み出されているため、実際の文字形の数はいくつ以上となる。なお他のセム系諸言語の大半と異なり、エチオピア語は左から右に向けて記される。この特徴はおそらく、エチオピア人が書法をインド系民族から教わり、それを彼らのセム系言語体系に適用したことによるものだと考えられている。

〈母音〉

- 1) a 〈短音符号が付く場合も多いが、通例の子音に伴う通常音のため a で表す〉
- 2) û (概して、各字中央部右側に楔線)
- 3) î (♪ 右下部分 ♪)
- 4) â (♪ 左下部分を欠くか左下に曲げる)
- 5) ê (♪ 右下部分に「マル」)
- 6) è(シェバー) (♪ 左上部分を「波化」)
- 7) ô (♪ 右上部分に「マル」)

3. 発音に関する注意事項 (cf. メルサ § 11)

①子音の重複

1. 子音が重複される場合には、重複される子音に関しても一字が記されるのみで、ヘブル語におけるダゲツシュのような特記符号がないため、文脈により重複の有無を判断する必要がある。
2. 子音の重複は、原理的には子音の同化ないし縮約にともなって生ずるものである。
3. すべての動詞の強意形における第二根字は、必ず重複される。
4. 子音が重複された場合、次に母音が続く場合にかぎり耳に聞き取れる。

②è 音 (シェバー) の読み方

- 1) 原則として、ヘブル語におけるシェバーと同様であり、有音の場合と無音の場合とがある。
- 2) アクセントの置かれるとき、もしくは重複の前に来るときには、常に有音である。
- 3) アクセントがなく、また重複もない場合；
 - a. 単語の第一音節ではつねに有音である。
 - b. 単語の末尾にあつては、通常無音である。ただし口蓋音+喉音、半母音、喉音のうちに属する場合、もしくは開いた音節を形成する場合を除く。それらの場合は有音。
 - c. 単語の中央部の音節にあつては、
 - 1) 有音 è の次の音節では無音。

2) 無音 è の次の音節では有音。

3) 二つの連続した無音 è は、語彙の末尾における場合に限られる。

4. 代名詞活用

1) 独立人称代名詞 (メルサ § 28)

〈単数〉

	m.	c.	f.
1	—	'ana	—
2	'anta	—	'antî
3 nom.	wè'êtû	—	yè'êtî
acc.	wè'êta	—	yè'êta

〈複数〉

	m.	c.	f.
1	—	nêHna	—
2	antêmû	—	antên
3 nom.	è mûntû	—	èmântû
	wè'êtômû		wè'êtôn

上表中 2 人称の antêmû および antên 形は、いずれも語尾を維持して動詞の当該変化形にも用いられるため、注意しておきたい。

2) 接尾人称代名辞 (メルサ § 29)

〈単数〉

	m.	c.	f.
1	—	〈名詞に〉 ya 〈動詞に〉 nî	—
2	ka	—	kî
3	hû	—	hâ

〈複数〉

	m.	c.	f.
1	—	na	—
2	kêmû	—	kên
3	hômû	—	hôn

上表のうち「〈動詞に〉付く *nī*」とは、動詞の目的語として付される場合の語形であり、本稿で扱う限りにあっては関係するものではない。

5. 動詞活用

まずラムダンを参照しつつ、オレアリにより (p. 232-3), セム語全般にあてはまる体系表の中に、エチオピア語の活用を書き込むことにする。オレアリではエチオピア文字にアルファベット転写がなされているが、以下順次本稿のものに合わせてゆく。なお例示のために挙げられている語彙は、ヘブル語などの場合と同様、*q-t-l*「殺す」である。

- G. I. *qatal-*
- II. *-qattel*
- D. I. *qattal-*
- II. *-qêttèl*
- C. I. *'aqtal-*
- II. *-âqattel*
- (N. I. *'anqôtal*)
- II. *-nqôtel*)
- Gt. I. *taqatl-*
- II. *-tqattal*
- Dt. I. *taqattal-*
- II. *-tqêttal*
- Ct. I. *'astaqtal-*
- II. *-âstaqattel*

上記において、G は基本語幹、D は強意〈重複〉語幹、C は使役語幹、N は *n-* に始まる受動語幹 (エチオピア語にはない)、Gt, Dt, Ct はいずれもそれら各々に対する *t-* で始まる再帰形を、また I. は完了、II. は未完了を表している。

一方メルサによる分類 (基本形による; § 37) は下記のようなになる。

		単純	強意	反復
単純	I	<i>qatala</i>	<i>qattala</i>	<i>qâtala</i>
使役	II	<i>'aqtala</i>	<i>'aqattala</i>	<i>'aqâtala</i>
再帰受動	III	<i>taqatla</i>	<i>taqattala</i>	<i>taqâtala</i>
使役再帰	IV	<i>'astaqtala</i>	<i>'astaqattala</i>	<i>'astaqâtala</i>

このようにエチオピア語の動詞活用は、上表において「使役」と「強意」が異なった範疇で交錯する点（ヘブル語やシリア語と異なる）や、「反復」という概念が介在する点、また「再帰受動」語幹のみならず、「使役再帰」語幹を活用体系のうちに含んでいる点で、他のセム系言語のシステムとはやや異なった印象を与える。これにともなう統語法上の諸特徴に関する考察は別稿にゆずり、本稿では変化表を掲げるのみとする。

I 単純語幹活用 (G)

〈完了形〉オレアリの表 (p. 241) は下記のようにになっている。

	sg.	pl.
3m.	-a	-û
f.	-at	-â
2m.	-ka	-kemmû
f.	-kî	-ken
1	-kû	-na

これと対照させつつ、メルサ (§ 40) の表を本稿での発音表記により、ラムダンに従って翻字する。

	sg.	pl.
3m.	qatala	qatalû
f.	qatalat	qatalâ
2m.	qatalka	qatalkemmû
f.	qatalkî	qatalkên
1	qatalkû	qatalna

〈未完了形〉オレアリの表 (p. 244) では下記のようにになっている。

	sg.	pl.
3m.	ye-	ye-
f.	te-	
2m.	te-	te-
f.	te-	
1	'e-	ne-

これと対照させつつ、メルサ (§ 40) の表を本稿での発音表記に従って翻字する。

	sg.	pl.
3 m.	yèqattèl	yèqattèlû
f .	tèqattèl	yèqattèlâ
2 m.	tèqattèl	tèqattèlû
f .	tèqattèlî	tèqattèlâ
1	'èqattèl	nèqattèl

続いてメルサの表 (§ 40) から接続法と命令法を翻字する。

〈接続法〉

3 m.	yèqtèl	yèqtèlû
f .	tèqtèl	yèqtèlâ
2 m.	tèqtèl	tèqtèlû
f .	tèqtèlî	tèqtèlâ
1	'èqtèl	nèqtèl

〈命令法〉

sg.m.	qètèl	pl.m.	qètèlû
f .	qètèlî	f .	qètèlâ

不定法は qatîl, 完了能動分詞の基本形は qatîlô である。

これに以下, 各語幹の強意形および反復形の諸基本形が付される。

・単純語幹の強意形 (D)

完了	未完了	接続法	命令法	不定法	完了能動分詞
qattala	yèqèttèl	yèqattèl	qattèl	qattèlô	qattîlô

・単純語幹の反復形 (L)

完了	未完了	接続法	命令法	不定法	完了能動分詞
qâtala	yèqâttèl	yèqâtèl	qâtèl	qâtèlô	qâtîlô

II 使役語幹活用 (C)

これ以降は, オレアリの表を参照せず, メルサの表の翻字から始める (§ 44)。

〈完了〉

	sg.	pl.
3 m.	'aqtala	'aqtalû
f .	'aqtalat	'aqtalâ
2 m.	'aqtalka	'aqtalkèmû
f .	'aqtalkî	'aqtalkèn
1	'aqtalkû	'aqtalna

〈未完了〉

3m.	yâqattèl	yâqattèlû
f.	tâqattèl	yâqattèlâ
2m.	tâqattèl	tâqattèlû
f.	tâqattèli	tâqattèlâ
1	'âqattèl	nâqattèl

〈接続法〉

3m.	yâqtèl	yâqtèlû
f.	tâqtèl	yâqtèlâ
2m.	tâqtèl	tâqtèlû
f.	tâqtèli	tâqtèlâ
1	'âqtèl	nâqtèl

〈命令法〉

2m.	'aqtèl	'aqtèlû
f.	'aqtèli	'aqtèlâ

不定法は'aqtèlô, 動名詞は'aqtîlô である。

・使役語幹の強意形 (C D)

完了	未完了	接続法	命令法	不定法	完了能動分詞
'aqattala	yâqâttèl	yâqattèl	'aqattèl	'aqattèlô	'aqattîlô

・使役語幹の反復形 (C L)

完了	未完了	接続法	命令法	不定法	完了能動分詞
'aqâtala	yâqâttèl	yâqâtèl	'aqâtèl	'aqâtèlô	'aqâtîlô

Ⅲ 再帰受動語幹活用 (G t)

〈完了〉

3m.	taqatla	taqatèlû
f.	taqatlat	taqatèlâ
2m.	taqatalka	taqatalkèmû
f.	taqatalkî	taqatalkèna
1	taqatalkû	taqatalna

〈未完了〉

3m.	yètqattal	yètqattalû
f.	tètqattal	tètqattalâ
2m.	tètqattal	tètqattalû
f.	tètqattali	tètqattalâ
1	'ètqattal	nètqattal

〈接続法〉

3m.	yètqatal	yètqatalû
f.	tètqatal	tètqatalâ
2m.	tètqatal	tètqatalû
f.	tètqatali	tètqatalâ
1	'ètqatal	nètqatal

〈命令法〉

2m.	taqatal	taqatalû
f.	taqatali	taqatalâ

不定法は taqatêlô, 完了能動分詞は taqatîlô である。

・再帰受動語幹の強意形 (D t)

完了	未完了	接続法	命令法	不定法	完了能動分詞
taqattala	yètqêttal	yètqattal	taqattal	taqattêlô	taqattîlô

・再帰受動語幹の反復形 (L t)

完了	未完了	接続法	命令法	不定法	完了能動分詞
taqâtala	yètqâttal	yètqâtal	taqâtal	taqâtêlô	taqâtîlô

IV 使役再帰語幹活用 (C t)

〈完了〉

3m.	'astaqtala	'astaqtalû
f.	'astaqtalat	'astaqtalâ
2m.	'astaqtalka	'astaqtalkêmû
f.	'astaqtalkî	'astaqtalkèna
1	'astaqtalkû	'astaqtalna

〈未完了〉

3m.	yâstaqaattèl	yâstaqaattèlû
f.	tâstaqaattèl	yâstaqaattèlâ
2m.	tâstaqaattèl	tâstaqaattèlû
f.	tâstaqaattèlî	tâstaqaattèlâ
1	'âstaqaattèl	nâstaqaattèl

〈接続法〉

3m.	yâstaqtèl	yâstaqtèlû
f.	tâstaqtèl	yâstaqtèlâ
2m.	tâstaqtèl	tâstaqtèlû
f.	tâstaqtèlî	tâstaqtèlâ
1	'âstaqtèl	nâstaqtèl

〈命令法〉

2m.	'astaqtèl	'astaqtèlû
f.	'astaqtèlî	'astaqtèlâ

不定法は'astaqaattèlô, 完了能動分詞は'astaqaattilôである。

・使役再帰語幹の強意形 (C D t)

完了	未完了	接続法	命令法	不定法	完了能動分詞
'astaqaattala	yâstaqaattèl	yâstaqaattèl	'astaqaattèl	'astaqaattèlô	'astaqaattilô

・使役再帰語幹の反復形 (C L t)

完了	未完了	接続法	命令法	不定法	完了能動分詞
'astaqâttala	yâstaqâttèl	yâstaqâttèl	'astaqâttèl	'astaqâttèlô	'astaqâttilô

冒頭にも記したように、これに続く形態論の詳細、および統語法の諸問題に
関しては、稿を改めて記すことにする。